

2022 年度第 2 回研究会（通算第 7 回）

- 日時：2022 年 7 月 24 日（日）14:00–17:30
- 場所：オンライン会議室
- 共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「文法化」というテーマのもとで、3 名のメンバーが、それぞれの分野内の話題を 35 分で提供したあと、各発表者の発表に対して、参加者の間で 30 分前後の質疑応答や意見交換を行った。

講師 1：佐藤陽介（AA 研共同研究員，津田塾大学）

「否定繰り上げ、短略化された暗意と使用・文法：架け橋は未だにそんなに遠いのか？」

本発表では、「否定繰り上げ読み」の性質とその起源について現在進行中の研究を紹介した。生成文法理論においては、この現象に対して、構造レベルでの否定辞の従属節から主節への繰り上げを仮定する分析と、一定の命題態度動詞が持つ排中律想定と主節否定の読みの作用から従属節読みを導く分析が提案されているが、まず、極性反転スルーシングを基に後者のアプローチを支持する証拠を提示した。次に、本発表の中心的仮説として、否定繰り上げはフェイス保持と丁寧さなどの誠実性条件を満たす断定の間接発話行為が文法化し、それが使用頻度に従って「短略化された暗意」として成立するという提案を行った。この仮説では、否定繰り上げは、話者の直観ではなく当該構文の使用頻度がより影響を及ぼすことになるので、否定繰り上げを許容する言語間でもその使用パターンは異なるという予測が立つ。この予測が正しいことを、シンガポール英語とイギリス英語間で主節否定の think の割合が有意に異なるとする Bao and Cao (2017) の調査結果から示した。上記の仮説が正しければ、否定繰り上げの起源や語彙的感度については生成文法流の語用論・意味論の知見が、その使用、定着度及び文法化の程度については用法基盤モデルの知見が有効であり、両アプローチは相補的關係にあることがわかる。

講師 2：中山俊秀（AA 研所員，東京外国語大学）

「文法体系の拡張：逸脱的構文の発達事例から考える」

本発表では、日本語における逸脱構文を事例として、そうした逸脱構文の発達が文法体系の特性を考える上で示唆する問題について考えた。具体的には、係助詞ハで始める発話形態（以下「裸のハ構文」）を取り上げた。裸のハ構文は係助詞が名詞句を伴わずに発話頭に置かれているという点で既存の文法規則を逸脱しているといえるが、繰り返し観察される（特に会話の中の質問-応答ペアの応答部で）、独自の音声実現形を持っている、相手への配慮を示す独特の語用論的機能を持っており、単なる例外や誤用とは言えず、一つの確立された文法パターンであるといえる。しかし、この構文を有効な文法パターンであると認めると、従来の構文形成の捉え方と相容れない問題が出てくる。それは大きく以下の3つにまとめられる：(i) そもそも文法規則で許容されない形が使い始められた；(ii) 文法規則で許容されない形が受け入れられて流通した；(iii) 新しい形が使われるようになった文脈は非常に限定的である。こうした問題は、構文形成が、既存の規則の枠を超えて新しい形を生み出しうるプロセスであるということを示している。

講師3：宮川創（AA 研共同研究員，国立国語研究所）

「エジプト語史における「言う」動詞から多義的な接続詞への文法化」

アフロ・アジア語族のエジプト語の最終段階であるコプト語の接続詞 *če-* の多義性について議論した。コプト語の接続詞 *če-* は、「言う」という意味の動詞 *čô* の連語形（限定詞句や名詞句が前置詞を挟まずに直接後続する形）である *če-* と同形であり、動詞 *čô* と同源であると考えられる。この接続詞 *če-* について、Güldemann (2008) のアフリカの諸言語における引用標識の文法化の議論をベースにして、「言う」という意味の動詞から、様々な機能を持つ接続詞への文法化を考察した。まず、Coptic SCRIPTORIUM コーパスを用いて、*če-* の出現例と共起動詞について調べた。その結果、接続詞 *če-* には、直接引用標識、間接引用標識、知覚動詞の補文標識、名前の標識（「～という名前の」の「という」）、理由節標識、目的節標識、関係節的名詞修飾節標識、反実仮想節標識としての機能があることがわかり、直接引用標識としての用法が最も頻度が高いことがわかった。さらに、接続詞 *če-* の機能の分布と、コプト語以前のエジプト語の *r-dd* の機能の分布が最も近いことから、接続詞 *če-* の起源は、*m-dd* ではなく *r-dd* であることを示した。

ディスカッショント：

柳朋宏（AA 研共同研究員，中部大学）

小川芳樹（AA 研共同研究員，東北大学）